

舞 踊 作 品 の 分 析 的 研 究

中学生、高校生、大学生における要因の認識について

磯 島 紘 子

I. は じ め に

舞踊は自己の内包するイメージを、身体という表現媒体を通して、運動的なシンボルに置き換え、観る者に伝達する美的な創造活動である。主体は自己の内的経験と感受性を律動の動きに託して、客体に語りかけ感性を呼びさます。そこには言語を越えた無言のコミュニケーションが存在する。このような無言の伝達のもたらす感動の世界こそ、芸術の原点であり、舞踊を生々と感知させるものであろう。また、舞踊はArt of movementと言われるように、シンボライズされた表現運動がその生命である。人間は本質的に、生命の躍動とも言うべき律動の喜びを根底に有している。身体表現により感得される律動の喜びは舞踊の根源をなすものであり、表現活動の基盤として働らくものである。また、同時に舞踊を創作し表現する活動は鑑賞の活動と表裏一体のものである。創作者の感動を視覚に訴え、身体運動を通して鑑賞者の心に受け止めるのである。その意味で、学校教育における舞踊＝創作ダンスの目的は、創作、表現、鑑賞の循環的な活動の中で、生徒個々の創造性を開発し、自己変革の動機づけをすることにあると言える。それ故に、舞踊教育に携わる者として、舞踊の特性をふまえ、対象の可能性を引き出し、独創性を伸ばす指導をめざさねばならない。その意味からも、舞踊創作の全体構造を明らかにし、対象の発達と現状に応じた段階的な指導法を体系づけなければならない。そのためには、舞踊創作において必要と考えられる要因を明確にするとともに、それらの要因が創作過程において、どのように機能しているかを把握することが問題解決につながると考える。そこで、前報¹⁾において、創作活動の実態を分析することにより、舞踊を構成する要因の把握のされ方を年齢別にとらえ、その傾向を報告した。すなわち、3才児から大学生までを対象とした実験を行ない、舞踊創作の過程において、教師の指導、助言により変容のみられた要因が、舞踊作品において、どのように配列、結合されているかを探ったものである。その結果から、本稿では、創作過程において自己変革のみられた中学生以上を対象とし、さらに、評価によって要因の把握のされ方を確かめることを目的とする。すなわち、各要因を配した創作指導を行ない、授業分析により、創作過程において対象が意図した要因を探り、さらに、生徒相互の評価において、その年齢において認識された要因を確かめるとともに、教師の評価により、作品において、それらの要因がいかに機能しているかを明らかにし、年齢別に舞踊創作における要因の重みを探ることを目的とするものである。

II. 研 究 の 方 法

1. 期間および対象

期間 昭和49年5月～6月

対象 岡山市立御南中学校2年生39名

岡山県立岡山大安寺高等学校2年生39名

岡山県立短期大学体育科2年生39名

対象とした作品は中学、高校、大学とも上位2作品、中位2作品、下位2作品を含む6作品ずつ。

2. 実験方法

- (1) 予備調査結果より、各年令に共通して頻数の多い題材に基づき、テーマを「現代」とし1フレーズの創作とした。
- (2) 指導の方法は、各学校のダンス担当の教師による1クラス単位の授業を行ない、1時間を創作指導、1時間を練習、発表、鑑賞、評価にあてた。
- (3) 指導案は中学、高校、大学ともに、同一の条件による指導、および助言内容とした。指導過程および内容は表1に示す。
- (4) 創作過程の分析内容は、①対象の内省記録、②授業の流れおよび作品をV.T.R.に収録したものについてである。
- (5) 作品の評価は、クラス全員による相互評価、およびV.T.R.を通して、ダンス指導者(中学校3名、高等学校3名、大学4名の計10名)による評価を行なった。評価の方法は、前報より得た結果から、評価の観点を次の7項目に設定し、これらについて、非常に良い、やや良い、普通、あまり良くない、悪い、の5段階により評価を行なった。

- 評価項目
- ①全体的に感じが出て訴えるものがある。
 - ②テーマのとらえ方が良い。
 - ③内容に合った動きの工夫をしている。
 - ④動きの速さ、リズムが効果的で内容に合っている。
 - ⑤空間の使い方が効果的で内容に合っている。
 - ⑥動きそのものがうまく、スムーズに美しく連続している。
 - ⑦構成の仕方は内容を盛り上げ、よくまとまっている。

表1 指導の流れと指導内容

題材……「現代」(個人による1フレーズの創作)

目標……(1)テーマ「現代」からとらえた内容にふさわしい表現を工夫し、変化と統一のあるフレーズにまとめる。……(第1時)

(2)全体を通してみて表現を確かめ、修正し練習する。友だちの作品を観て、全体的、分析的な評価をする。……(第2時)

時間	過程	指導の流れ	指導内容
1	導入	課題提示 ↓ 各要因の提示 表わし方、まとめ方の説明	●実験のねらいと創作手順、表現の手法について説明 ●ポーズによる即興表現(2人で模倣、対応)
	展開	課題把握 ↓ イメージの具体化 動きのデッサン ↓ イメージの焦点化 動きづくり ↓ 時間、空間、力要因の再確認 フレーズづくり ↓ 美的形成要因の再確認	●テーマから連想されることをあげさせる。 ●その中から、もっとも表現したいものを選ばせる。 ●主になる動きの感じをつかませる。 ●中核を決め、全体の見通しを立てさせる。 ●主になる動きにリズム、空間、力性の変化を加え、発展させる。 ●動きをつないで1フレーズに発展させる。 ●始めと終りの工夫をさせ、全体をまとめさせる。
2	整理	確かめ、修正、踊りこみ ↓ 発表、鑑賞、評価	●全体を通してみて、テーマ、内容にふさわしいかを確かめ、修正させる。 ●全体の運びを考えさせながら練習させる。 ●グループを組ませ、個々の作品の発表と鑑賞をさせる。 ●抽出した生徒の作品をクラス全員に鑑賞させ評価させる。

III. 結果と考察

1. 対象の内省記録、V. T. R. による授業分析より、創作過程において対象自身が意図して大切に、変化、工夫のみられた要因について考察する。(対象の内省記録は表2に示す。)

表2 対象の内省記録

対象作品	表現内容	意図して大切にしました点	変化、工夫した点	自己の作品の反省
中学校2年	M 弱肉強食	強者(固い動き)と弱者(やわらかい動き)の対比	遅速、強弱による動きの変化	動きの速さを変えたがうまく表わせなかった
	N 物の価値	激しい訴えのようすを盛り上げる	苦む様子を入れた	激しさが思い切り出せなかった
	O 海の汚染	水が濁っていく様子	腕の動きから身体を使った動きに	汚さはもつと身体全体を使ったら良かった
	P 大気汚染	元気だった鳥が公害に侵されていく動き	重く暗い感じはリズムを遅くした	感情の入れ方が足りなかった
	Q 公害	緑が生き生きしているところから枯れていく過程	全体の長さを少し短かくした	枯れ方があるという間に終わってしまった
	R 若さ	新鮮さ、明かるさの感じを出す	中にジャンプとターンを入れた	同じ動きのくり返しが多すぎた
	G 若者	若者の複雑な心の動き	内容が多すぎたのでしぼった	動きが同じ調子で変化がなかった
	H 孤独と希望	孤独感から希望へとめざめる動き	立ち上がる動きを入れて変化させた	動きがきくしくやくして流れがとぎれた
	I 破壊	動きと動きのつなぎ	破壊らしきが出るように動きを変えた	何となく終った感じて訴えがなかった
	J 若者の孤独感	華やかさと孤独との対比	強弱変化をつけてみた	表と裏の感じがはっきりと出なかった
高校2年	K かなえない希望	人はいつも何かにあこがれている感じ	——	全体的に自分の思っている感じが出なかった
	L 絶望	さびしさ、孤独を強調する動き	——	内容を強く訴えることができなかった
	A 人間は何を求めるか	最後を盛り上げて求める感じを強く出す	最後のポーズ、リズムを遅くした	盛り上げがまだ弱かった。フレーズが長すぎた
	B 破壊される海	きれいな海と汚れた海の対比	動きを整理してフレーズを知かくした	動きに強弱がなく、つなぎがとぎれた
	C 自分	矛盾した社会の中で人間本来のやさしさ	鏡さとやわらかさの動きの対比	視線、問のとり方が有効でなかった
	D 不安定な心	揺れ動く不安定さを強調する動き	はじめと終わりの動きを同じ動きに	うまくまとまらず、訴えたいところまでいかなかった
	E 群集の中の孤独	雑然とした動き、直線的な動きの対比	動きを整理して、フレーズを短かくした	訴えたいことがうまく表わせなかった
	F 汚染された海	活気溢れる町からさびれた町への移り変わり	不安、暗さの動き、リズムの変化	活発さが出せず、終始同じ調子だった

中学生は、表現の中核となる部分の「動き」の工夫に重点をおいて創作を進め、作品M、Rにみられるように、その動きの感じをより強めるために、「動きの強弱」、「リズム」を変化させている。また、作品Q、Rにみられるように、表現内容に適した「フレーズの長さ」を意図し変化させている。

高校生は、全体的に感じを盛り上げるといった漠然とした意図の仕方であり、その中で「動き」の工夫はしているが、表現内容との関連における要因についての意識はみられないようである。

大学生は、中核となる部分の「動き」を強調、対比などの手法で印象づける工夫をし、その過程で「リズム」「強弱」の変化をさせている。また、表現内容を訴えるための印象的なはじめ方、終り方、効果的なフレーズの長さなど、「フレーズ構成」についても意図し変化させている。

2. 対象とした作品についてのクラス全員による相互評価の結果を脇本式星座グラフ^{**2)}に描き、年齢別に各要因に対する価値感をとらえ考察する。(星座グラフは図1-1～3に示す。)

点のばらつきの様相より、各要因に対する認識の度合いを年齢別に考察し、1の結果と比較、対照する。

中学生においては、対象6名の作品(M、N、O、P、Q、R)の評価は、どの項目も点のばらつきが小さく、星座の左半円内に分布している。このことは、6作品に対する評価が同じように高く、項目間の差がないこと、すなわち、各項目に対する認識について、個人間、要因間に差がないことを示している。

その中で、比較的、星座の左方にあり評価が高かったのは、「動き」「動きの流れ」「全体の感じ」である。「動き」については、1において得られた要因と一致している。また、中心軸に近く分布し、やや評価が低かったのは、「空間」「構成」の要因である。

高校生においては、各作品(G、H、I、J、K、L)とも評価項目に点のばらつきがかなりあり、星座の左右、上下空間に広い範囲にわたって分布しており、個々の作品に対する評価に

図1 各作品における要因の分布

注 A-R…作品名
●…全体の感じ
○…内
▲…動き
△…リズム
■…空間
□…動きの流れ
×…構成

図1-1 中学2年

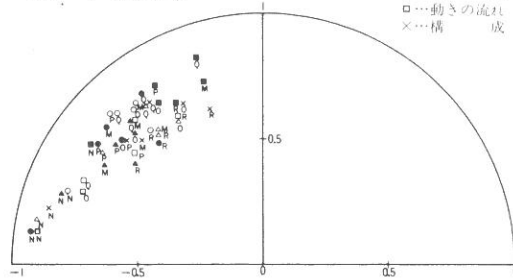


図1-2 高校2年

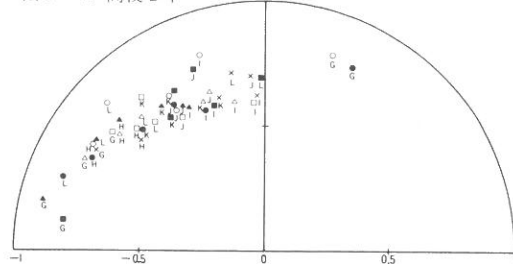
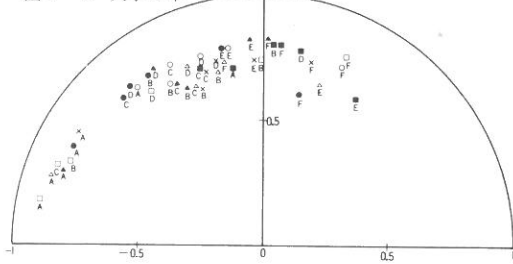


図1-3 大学2年



* 星座グラフは、脇本和昌博士により創案されたもので、多次元データが直観的に把握でき、図式化による集団の傾向、およびその中における個人の位置を、同時視覚化によりとらえることができるものである。

において、要因間にかなり差があることを示している。とくに、作品Gについては星座の左端から右上まで点が大きくなるにつれ、要因間の差が顕著に出ている。その中で各作品に共通して評価が高かったのは、「動き」「全体の感じ」であり、1において得られた要因と一致している。また、共通して評価が低かったのは、「空間」「構成」の要因である。

大学生においては、各作品（A、B、C、D、E、F）における項目の点が円周に近い位置のほぼ同じ高さに散らばっている。このことは、評価者の価値感にアンバランスが少なく、評価が妥当であることを示している。その中で、「動きの流れ」「全体の感じ」「動き」「リズム」が星座の左部分に位置し、比較的高い評価が得られ、1において得られた要因と一致している。「空間」「構成」の要因は中心軸附近に位置し、低い評価であり、「構成」要因については、1において得られた結果と一致せず、対象自身が意識した要因と、その年齢における要因の認識においてずれが認められた。

3. 対象とした作品についての教師による評価の結果より、各要因間の相関を求めた。（図2に示す。）

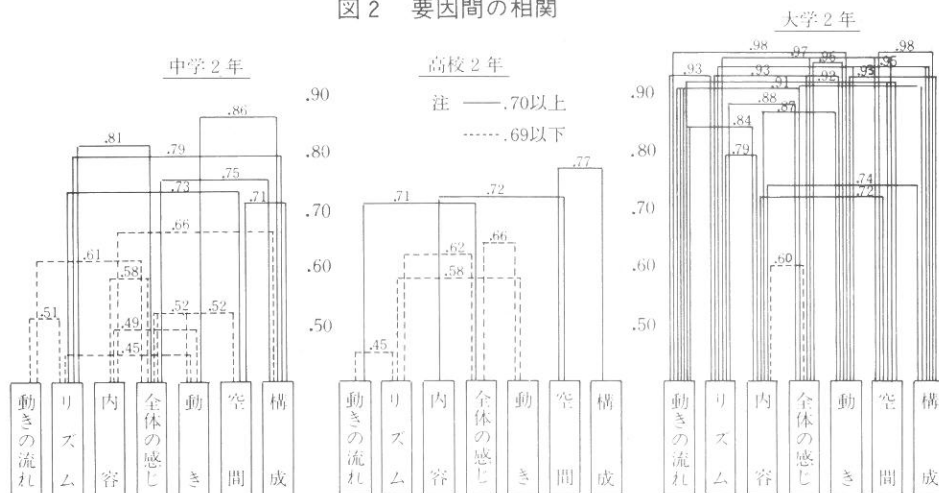
要因間に相関のみられたものについて、年齢別に考察する。

中学生においては、高い相関が得られたのは、「動き－構成」(.86)「リズム－全体の感じ」(.81)「リズム－構成」(.79)「全体の感じ－構成」(.75)「リズム－空間」(.73)「空間－構成」(.71)である。これらの結果から、「動き」「リズム」「空間」の要因はフレーズ構成に効果的に機能しているが、表現内容と各要因との関連が弱いことがうかがえる。

高校生においては、相関のみられた項目がひじょうに少なく、その中でやや相関がみられたのは、「空間－構成」(.77)「内容－空間」(.72)「全体の感じ－動きの流れ」(.71)「全体の感じ－動き」(.66)である。全体的に各要因間の相関が低く、また中学生よりも低い現象を呈していることは、1において考察したように、対象が創作過程において、表現の中核をしぼらず、全体的に感じを出すことのみで終り、そのため、表現内容と結びついた要因への認識が浅く、作品においても、それらが有効に働いていなかったものと思われる。

大学生においては、ほとんどの項目間にかなり高い相関が得られた。その中では、「内容－他の要因」間 (.60～.87)における相関がやや低く、その他は係数.90以上であり、創作過程において、対象が意図した要因が、作品において「フレーズ構成」に有効に機能していることがうかがえる。

図2 要因間の相関



以上の結果から、舞踊創作過程において、対象が意図して工夫し、それらが作品において有効に機能した要因について、年令別にまとめる。

中学生では、①対象の意識、②相互評価、③教師による評価、において一致した要因は「動き」である。対象が意識した「リズム」の要因は教師による評価において、高い評価が得られたが、相互評価においては「リズム」よりも全体的な「動きの流れ」に価値を認めている。

高校生では、①、②、③において一致したのは、「全体の感じ」である。各々の要因については、対象の意識はあまりみられず、相互評価、教師による評価とも低い評価である。

大学生では、①、②、③において一致した要因は、「動き」、「リズム」である。対象が意識した「構成」の要因は教師による評価との一致がみられるが、相互評価においては「動きの流れ」「全体の感じ」に価値を認めている。

IV. ま と め

以上の結果から、各年令の舞踊創作過程において、認識された要因について、前報の分析結果との比較においてまとめる。

中学生の創作活動においては、主に「動き」の要因に重点を置き、表現内容に適した動きの選択、リズムの工夫をし、それらはフレーズ構成に有効な要因となっている。このことは前報の結果とも一致するところであり、この期におけるフレーズ創作の指導において「動き」「リズム」が重要な要因であることが確かめられた。

高校生の創作活動においては、個々の要因に対する認識のされ方が浅く、全体的な感じや動きの流れを重視している。このことは前報における、すべての要因について意図した作品構成である³⁾。との結果と一致せず、対象の問題、実験方法など今後究明すべき問題として残される。

大学生の創作活動においては、主に「動き」「リズム」の要因に重点を置き、表現内容を盛り上げるためのフレーズの構成の仕方についても工夫し、それらが有効に機能し合って変化と統一のあるフレーズを形成している。このことは、前報の結果とも一致するところであり、要因間の結合—統合の姿が確かめられた。

以上のことから、舞踊の創作過程において対象により、認識し把握され、作品を方向づける主要な要因が確かめられ、創作ダンス指導の体系化へ接近する手がかりが得られた。今後はこのことを基として、発達段階に応じた具体的な指導内容の系統化を図らねばならないと考える。

(この論文は、昭和50年9月、日本体育学会第26回大会において口頭発表したものを、さらに詳しく考察を加え整理したものである。)

文献注

- 1) 磯島紘子 岡山県立短期大学研究紀要第17号 38~45頁 (1973)
- 2) 脇本和昌 星座グラフ解説 明治図書 11頁 (1975)
- 3) 磯島紘子 岡山県立短期大学研究紀要第17号 44~45頁 (1973)

参考文献

- 山本正男監修 比較芸術学研究 V 芸術と表現 美術出版社 (1977)
- S. K. ランガー著 シンボルの哲学 岩波叢書 (1975)
- S. K. ランガー著 感情と形式 I 太陽社 (1975)
- 石福恒雄著 身体の現象学 金剛出版社 (1977)

教育心理 Vol. 22 No. 6 1974 図式化による要因分析法
教育心理 Vol. 22 No. 7 1974 図式化による要因分析法
教育心理 Vol. 22 No. 8 1974 図式化による要因分析法
体育科教育 第21巻第3号(1973) 体育科教育と授業研究

昭和53年3月31日受理